

ケンタッキー州レイビルのファームシヨウに行ってきた。その前にLA近郊で旧友と遊び、フットマツサージもやった。パームスプリングスからレイビル行きの飛行機に乗るの近郊にあるアウトレット・モールに寄ることにした。

大陸ピーポーが闊歩するLAの街

予想はしていたが、たくさんいる大陸ピーポー。そのためか以前は駐車場になっていた場所がすべて新しいショップになり、たった4年で劇的に風変わりする様に驚いてしまった。

ここでは、長年使い込んでくたびれたスーツケースを、そろそろおニューに変えようと思っていた。たしかあの辺りと記憶をたどりながらサムソナイトのショップで170\$で買った。ざっくり国内価格の1/4は魅力的だった。

次はブルックス・ブラザーズ。肌着として着るTシャツを10枚、ワイシャツ、普段着を買い込み、先ほどのスーツケースの中に放り込んだ。遅いランチをとるためにイタリアン、メキシカン、バーガー、チャイニーズの店があるフード街に向かい、タコ(ス)とサラダを頼み席に着いた。セルフ式なので片づけも自

分で行なうのだが、周りを見るとプレートは置きっぱなし、こぼれたジュースでテーブルはびしょびしょでも、お構いなしに席を立ってしまふ。

カチンときたので、近くにいたメキシカンのおばちゃんから布巾を借りてわざと大げさにテーブルを拭いてみたら、案の定、常識知らずの大陸ピーポーは頬張っていたバーガーを止めて、私の方を注視した。これだけでは面白くないので、きれいなになったテーブルには1\$のチップを置いて席を立った。

帰ってから子供たちにこの話をしたら「あゝあの人たちのやることは昔から知っているよ、でもセルフなんだからチップは余計だったね」と褒めてくれた。

レンタカーに買い物を入れて、30分ほど東にあるパームスプリングスの宿泊先ベストウエスタンに向かった。ところでベストウエスタンとホリデーインのどちらが良いホテルかご存じですか。米国のちょっとした町に行けば必ずこのふたつのホテル



私はシヨーン・Kではありません



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

がある。中国にベストウエスタン系列のシエラトンはそこそこあるが知名度は低いようで、明らかにホリデーインのほうが名は知れ渡っている。そうなると米国の大都市で宿泊する場合、どちらのホテルが静かなのかは火を見るよりも明らか。ちなみに、フェイールドインやハンプトンインも朝食無料だが、大陸ピーポーに遭遇する機会はまずない。

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

なぜミヤイは アミーゴと間違われる

ホテルには17時ごろに到着した。さてスーツケースは2個ある。航空チケット的には3個まで無料扱いだが、この後ケンタッキー、ノースダコタへの搬送が面倒なので宅配でノースダコタまで送ることにした。そこで近くのフェデックスをカーナビで探して営業所に向かった。

日本ではほとんどのコンビニ店や多くのガソリンスタンドで集配をお願いできるが、米国では営業所に持って行くか、誰かがいるときに取りに来てもらうかの選択が多いように、それほど集配システムを複雑化していないように感じる。

さて、日本人が参入して米国の宅配システムに革命を起こすことができるのか——。話を戻そう。

フェデックスは行方不明率が高いDHLとは大違いだ。トラックがびっしりと倉庫に並び、仕分けもテキパキしている。急ぎ便だと100\$だが、4日かかるエコタイプだと50\$だという。時間の余裕があるのでエコタイプにした。これで身軽になり、さっそうと自動扉を出て車に戻りかけたとき、乗用車が私の方にゆっくりと向かってきた。彼女は車の窓を開け「Hasta que hora esta

abierto?」（何時まで開いていますか）」と聞いた。「Me abro hasta 1800」と答えられなかったため、ソリーと言いつ返すと不思議そうな顔して英語で聞き直してくれた。

はい、はい、そうですよ。私の顔はあなたの親戚と同じ顔をしていますから間違ったのでしょ。

さかのほれば1995年1月26日、オランダ・スキポール空港。こちらをチラ見する人が近づいてきて「あなたはロドリゲスさんですか」。はあ?と思いつながらノーと答える、たいそうがっかりしたところに本物のロドリゲスさんが現れ、私とどう見ても違うよな。

ミシガン州のアミーゴが多く働いている農場に行ったときは、遠く離れても「仲間が来た」と大騒ぎになった。当時の成田発のノースウエスト航空に乗り込んだときはアミーゴC Aが私を見て突然メキシカンで話し始め、隣にいたかわいい日本人おねーちゃんも一緒に大笑いしてくれた。LAを歩いていると嘘くさいスーツを着たアミーゴからメキシカンで「寄付してください」と言われたが、シチズンではないのでその義務はないと強めに言ったら、「じゃーお前は何人なんだ?」と突っかかってきた。

もし髪の毛が金髪で目がブルーア

イだったら、ナタリーと歌ったフリオ・イグレスィアスの弟くらいの扱いだっただけだと親を恨んでも仕方ないことなのだ。

「Te amo」真顔で口説く ヒール・ミヤイであった

似たようなネタがあるので、今回の米国内に話を戻します。ケンタッキー、ノースダコタ、ミネソタの用事も済み、ミネアポリス発DWF（ダラス・フォートワース）とLA X（ロサンゼルス国際空港）を経由して羽田に向かう予定でいた。ところが、DWFで出発が2時間遅れ、結局羽田行きに乗れなくなり、LA X近郊で宿泊することになった。

ターミナルの外のホテル・ピックアップで待つこと30分、ようやくバスに乗り込んだのが21時過ぎだった。ウトウトしていると、運転手が車内に一人しかいない私に話しかけてきた。

「どこから来たんだい」とインドなまりのある英語だった。この手の会話はよくあることなので「ホッカイドウ・ジャパン」とすぐ答えた。

間違っても「ジャパン」などと単語で答えることはしない。多少はバクチになるのだが、「ジャパン」と答えると、たいてい「トウキョウ?」と聞かれる。「ホッカイドウ・ジャ

パン」と答えると20%くらいの割合で「寒いところからようこそ」となるし、残り80%は「ホッカイドウってどこ?」と聞かれて「マイナス25ファアレンハイトの寒くてレゲイ系（ホームレス）がほとんどいない所なんだよ」と言うのと驚いてくれる。

さて、この運転手からこんな質問を受けた。「ところでそんな寒いところに仲間はたくさんいるのか?」そこで何をしているのだ。

最初は職業を聞いているのか、単に人が住んでいるのかという質問かと思ったがそうではなかった。運転手は「えっ! あんた日本人だったのか...? てっきりアミーゴかと思っただよ」

ホテルに着くと、運転手が学生アルバイトだという受付のアミーゴ・セニョリータにこう言った。「この人アミーゴじゃなくて日本人なんだって」

その瞬間、学生セニョリータは私をジッと見て、3秒後に口を押さえた。てっきり鼻炎の症状でもあるのかと思った瞬間、大笑いを始めた。

今度メキシカンで「Te amo（愛しているよ）」と真顔で口説いてやろうと考えるヒール・ミヤイである。あれ? なんか忘れてるな。というところでケンタッキーのお話は次回のお楽しみで。